

第2分科会

授業評価の現在(いま) ～授業アンケートの実情と課題～

● 報告者

大塚 雄作 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授)

三尾 忠男 (早稲田大学教育・総合科学学術院 教授／FD推進委員会副委員長)

高井 康弘 (大谷大学文学部社会学科 教授)

● コーディネーター

山内 清郎 (大谷大学文学部教育・心理学科 准教授)

● 概要

学生による授業アンケートは100パーセントに近い大学で実施されているのが現状である。しかしその結果を、FD活動のために、例えば、授業改善、教員の反省と成長のために、いざ活用しようとする点になると、未だ決定的なスタイルが確立されているわけではなく、多くの大学が、まだ模索の状態にあるというのが実情ではないだろうか。

個々の大学で、その事情も大きく異なるだろう。例えば、そもそもアンケート項目を作ったときに、その後の活用まで十分に考えていなかったため、データ分析に困ること。アンケート結果をどのようにフィードバックするかについての悩み。どう授業改善に活かせばよいのかについてのとまどい。本分科会では、まず、授業アンケートの実情、その分析や課題について、そして活用についての報告を行なう。そうした報告をふまえたうえで、授業アンケートの実質化に向けて、参加者全員でディスカッションする場を準備したいと考えている。

【第2分科会】

授業評価の現在(いま) ～授業アンケートの実情と課題～

参 加 人 数 41名

分科会報告者

- | | | |
|----------|-------|----------------------------------|
| 第1報告者 | 大塚 雄作 | (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授) |
| 第2報告者 | 三尾 忠男 | (早稲田大学教育・総合科学学術院 教授/FD推進委員会副委員長) |
| 第3報告者 | 高井 康弘 | (大谷大学文学部社会学科 教授) |
| コーディネーター | 山内 清郎 | (大谷大学文学部教育・心理学科 准教授) |

分科会のねらい

第16回FDフォーラムの全体テーマは「組織的FDの取組～FD義務化から現在(いま)～」である。第2分科会のタイトルは、全体テーマを若干拝借する形で「授業評価の現在(いま)～授業アンケートの実情と課題～」とした。いわゆるFD義務化から現在にかけての「何かせねばならない」「一定の成果を見せねばならない」「組織的なものにせねばならない」という性急さの意識、あるいは自分たちの大学は果たして世の潮流にきちんと乗れているだろうかという不安感のようなものが、授業アンケート実施の面でも極めて顕著に現われているように思われたからである。

FDに関連しての授業評価の研究会等では、例えば、ウェブや携帯電話を利用したアンケートを取るための最新方法が紹介されたり、あるいは、授業アンケートの活用の先進的な事例——例えば、アンケート結果の公開、公開された結果をともなう検討会、公開授業等の教員間のピアレビュー、教員の表彰制度等々——が説明されたりすることが少なくない。改めて断わるまでもなく、これらのアンケート実施方法の面や活用の面での工夫は大切であり必要である。確かに必要ではあるが、一方でこうした先進的な事例を聞けば聞くほど「それと比べて自分たちの大学では…」といった気恥ずかしさや、「こうした場で報告される大学の事例には相応のノウハウと蓄積があるのだから自分たちの大学では真似することが難しい…」とか、また教員個人のレベルでは「そうはいつでも自分は授業が得意でないし…」等といったあきらめのような気分が先立ってしまうことも少なくない。あるいは逆に、そうし



た先進的な事例の熱にたきつけられて、自らの大学に帰り、早速熱心に授業アンケートの改善等を訴えてみても、必ずしも周囲の教職員の協力は得られるわけではなかったりして、せっかくの授業アンケート改善熱も一時の熱病のように冷め、結果、従来通り実施して済ますことに落ち着いてしまうような場合もあるかもしれない。

このようなある種の切迫感を一度クールダウンさせ、また、授業アンケートをめぐる徒労感を今一度奮起させる意味でも、そもそも授業アンケート導入時の目的は何であったのか、どのような経緯で導入しようとしたのか、そして、そこからどういった活用が可能であると当初は考えていたのか、さらには、いま現在実施している授業アンケートが当初の意図や思いから結果としてかけ離れたものになってしまっていないだろうか等々のことを改めて一息を入れながら地に足のついた場所から考えてみようという思いが本分科会のタイトル——特にサブタイトルの「実情と課題」の部分——に込められた。そしてその際に一つのキーワードとなるのが「実質化」である。

学生による授業アンケートが多くの大学で取り入れられてかなりの年月が経ち、実施率もほぼ100パーセントに近いはずである(が、最近では逆に授業アンケートを廃止する方向で検討している大学も出始めているようである)。しかし他方でFDに関して言えば、これだけ長く実施される実績をもちながら、授業アンケートほど繰り返し槍玉に挙げられることの多いものもめずらしい。「授業アンケートを実施しても記入・記述する側の学生の評価能力はどうなのか」「授業アンケートに関しては、多くの場合、集計が配られて、後の解釈や授業改善への手だては教員個人任せのままで、そのメリットが十分に見えない」といった声がすぐにも思い浮かぶ例であろう。だがこのことから早急に、役に立たないのであれば授業アンケートをやめればいい、あるいは、今の授業アンケートが役立たないならばもっと役立つアンケート活用の実例・模範例を自分たちのところにも導入すれば問題は解決だということにもならないだろう。

むしろ、こうした否定的な声も含めて授業アンケートに関する具体的意見や見解が当然のように教職員間で交わされる機会が増えていること自体、一種の「大学文化内での地位」とも呼べるようなものを「授業アンケート」が確立しつつある証拠だところでは考えたい。具体的な文句、悩み、困り事、とまどい、徒労感等々が一定教職員の間で普通に交わされるという事実が、授業アンケートが自明のものとして各大学にある程度定着し「実質化」しつつある証拠であり、「実質化」のさらなる深化を進めるための必要不可欠な材料だと思うのである。

そこで本分科会では話題提供のために3人の先生にそれぞれ次のような観点からご報告をいただいた。大塚先生には、授業アンケート・授業評価に一種の大学文化的地位のようなものが確立され、その実施がある程度は自明視されながらも、同時に、その有効性が頻繁に問い返される現在、改めて「何のための授業評価か」「授業アンケートの目的は何か」等の根本的な問いを再確認する観点からのご報告を、三尾先生には「授業実践・授業改善と授業アンケートとの関連性」の観点からのご報告を、高井先生には、特に「実情と課題」面について、授業アンケートの実施について制度面・活用面での具体的な悩みやとまどいや困り事等を、FDの担当者である教員の立場から「ある大学の一事例」としてざっくばらんに、かつ真摯にご報告をしていただいた。

分科会の概要

1. 分科会に参加の方々への事前アンケート

第2分科会当日の流れを計画する段階で、報告者の先生がたとえ相談を重ねるうちに、上記の「実質化」の観点から、本分科会参加予定の方々に事前アンケートをお願いし、その回答をふまえてグループに分かれてのディスカッション的活動を分科会に導入するのがよいのではないかという結論にいたった。分科会参加予定者に事前にメールにて依頼したアンケートとは、A4用紙の上半分に下記の①～③の質問項目とその質問項目が当日の本分科会の流れとどう関連するのかの説明とを記し、残り半分程度の大きさの枠を質問項目①～③への回答用の自由記述欄として設定したものであった。

【分科会参加者への事前アンケートの質問項目】

① 授業アンケートを実施する大学は、100パーセント近くに達しています。ですが、アンケート結果のフィードバック(学生に、教員に、職員に、学外・公開的に、等々)に難しさや困惑等を感じている大学も少なくないと思われます。

アンケートの結果の扱いについて、貴学での現状はいかがでしょうか。よろしければお教えてください。困っている点、貴学で工夫されている点等について、自由にご記入ください。

② 授業評価の手段は、大学での公式なアンケートに限られません。授業における個人的な工夫(ミニッツペーパー、コミュニケーションペーパー等)、学生との間の授業の感想の交換、インフォーマルな会話等も十分に授業評価の材料になると思われます。

上記のような、公式なアンケートに留まらない、広義の授業評価に含まれると見なせる実践や工夫について(できれば、ご自身の経験を踏まえて)思いのままに自由にご記入ください。

③ いま実施されているアンケートの個々の具体的な質問項目等について、アンケート実施を重ねていくうちに、当初の「ねらい」「目的」「何を明らかにしたいのか」等への意識が薄れていくことはめずらしくないと思われます。

いま実施されているアンケートについて、個々の具体的な質問項目等に改善すべき点はありませんか。あるいは、改善すべきだと思うが、どう改善すべきかお悩みの点はございませんか。どうかお教えてください。

これらの質問項目を分科会当日にどう使用するのかについては以下の点を書き添えた。

- ・ 後半の全体の意見交換・自由討論・質疑応答に入る前に、参加者には3グループに分かれ、ディスカッション的活動を行なっていただくこと
- ・ ①～③の質問項目は3グループに分かれる際、志望される分団の確認もかねていること(回答・志望いただいた質問にできるだけ沿ったグループ分けを行なう)
- ・ 寄せていただいた回答が、必ずしも大学での統一的公式の見解とは限らないことは承知しており、あくまでも個人的な見解として思うままに記述していただきたいこと
- ・ 各自お寄せいただいた回答は、当日のディスカッションの素材にもなること
- ・ もう一つディスカッションの素材として各大学で実施されている授業アンケートの用紙の実物を、当日持参していただきたいこと

事前アンケートに対しては自由記述形式の面倒さにもかかわらずほぼ全員の参加者から回答枠をはみ出さんばかりのたくさんの回答をいただいた。この事実だけからも、授業アンケートに対する教員・職員双方の関心の高さがうかがえる。自由記述での回答であったので、その回答全てについて詳細な分析を行なうことは難しい。ここではコーディネーターの気づいた点をいくつか簡単に示すに留めたい。

- ・ 第一に授業アンケートへの関与の仕方の多様性である。まず大きくは教員と職員に分かれる(今回の参加者の比率で言えば、教員:職員=2:1であった)。同じ教員の中でも、大学マネジメントの側にあるのか、FD関連の役職にあるのか、あくまで授業アンケートをされる一教員としての立場にあるのか等々、それぞれの立場によって授業アンケートへの問題関心は様々である。
- ・ また各大学の学校種や学部による多様性も見られる。(これは実際のディスカッションで話題に上ったことであるが)例えば、芸術系のような実技面が重視され個人レッス的な授業形態が主たる場合と、他の学校種・
- ・ 学部ではアンケートの意味づけがずいぶん異なる。また、同一学校種・学部内でも異なる授業形態(講義科目、演習科目、実験・実技科目等)があるし、その違いをどう考慮すべきかといった問題の指摘もあった。

- ・ 質問①については、大半の大学で、対受講学生や対教員個人のレベルから一般公開のレベルまで、その実情に応じた形態でフィードバックや公開が実施されているが、それらの結果がどう活用されているかの「チェック」を「組織的に」行なうことに課題を感じている様子うかがえた。
- ・ 質問②については、(本分科会への参加者である分、大きくバイアスがかかっていることは考慮しなくてはならないが)少なからぬ教員がフォーマル、インフォーマルを問わず、授業についての学生の声を聞くための工夫の必要を感じ、実際に何らかの独自の工夫を行なっている実態が示された。
- ・ 質問③については、その回答を簡潔にまとめると「悩み深い」となる。例えば、質問項目自体に曖昧さや抽象的すぎる等の不備のあること、授業形態にうまく適合しない項目のあること、アンケート結果からどの程度信頼できる情報が抽出できているかの確証がないこと等々。その点を改善した質問項目設定やアンケート実施法を模索しているが決定的なものにいたっていない実情が浮かび上がった。

2. 当日の進行

午前中3人の先生からそれぞれ30分をめぐにご報告いただいた(各報告の概要については後述)。昼休みに入る前に質問用紙による質問を受け、午後の冒頭で質問用紙のうち事実確認的な内容について報告者から簡単な回答をもらった。

その後、参加者には、質問①～③に対応した分団ごとに分室(小教室)に分かれてもらい、報告者の3人の先生にはそれぞれファシリテーター的に各分室に入ってもらった。質問①についてのディスカッションを志望した参加者は「アンケート結果フィードバックの悩み・工夫」分団(高井先生)、質問②志望者は「広義の授業評価・個人的な実践・工夫」分団(三尾先生)、質問③志望者は「授業アンケート項目の改善・悩み」分団(大塚先生)といった具合である。また各分団を、さらに原則5名ずつ程度の小グループに分けた。1時間あまりの時間で意見交換をするのに適切なグループ規模を考慮してのことである。

意見交換はおおむね活発に行なわれていたように思う。事前アンケートによって考えてもらっていた問題関心が参加者各自の念頭にあったことと、各大学の授業アンケートの実物を持参していただき(中には授業アンケート結果公開の冊

子等も自主的に持参してくださった方があった)具体的に実例を示しながらの発言になったことも意見交換をスムーズにしたと思う。1時間程経過した時点で、グループごとの意見交換・ディスカッションを終了してもらい、再度大教室に集合し、おおむね1時間程度の全体討議に移った(こちらの内容も後述)。

3. 報告の概要

(1) 『学生による授業評価アンケート』実施の

現状と課題:大谷大学の場合」(高井先生)

もともとの予定では3番目の報告者になるはずの高井先生に報告のトップバッターをお願いすることになった。というのは、3人の先生がたの報告レジュメを拝見し、「具体事例」(高井先生、三尾先生)を先に提示し、その後に「Q & A」(大塚先生)を応答的に報告していただく方が自然な流れになるだろうということになったからである。

さて、高井先生からは、大谷大学の教務委員会FD部会長(教員のFD担当責任者)の立場で、大学に授業アンケートが導入された制度的背景とその経緯、その経緯がよくもわるくも反映されている授業アンケートの現状、特にその「アンケート実施目的」の位置づけを中心にご報告いただいた。先に高井先生のご報告を『「ある大学の一事例」』としてざっくばらん、かつ真摯に」と形容したが、この報告では、授業アンケートの導入から現在にいたるまで、授業アンケートとFD活動とが、なかなかうまく連携を持てずにいる大谷大学の現状を——普通はつい言葉を慎重に選びながら話すような内容であるにもかかわらず——率直に丁寧にご報告いただけたと思う。

一例を挙げれば、授業アンケート実施主体部署とFD活動実施主体部署とが、学内の制度配置的にも時系列的にも大きくずれた形で設置されて制度的不整合を保ったまま現在にいたっているということである。こうした制度的不整合は、当然、アンケート結果の開示や、FDとしての組織的なデータ活用をいかに実施するかにも影響を及ぼす。具体的な授業アンケートの改善以前に、各部署間での課題意識の共有不足・連携不足は、授業アンケートとFD活動との双方に不全感を生み出す。現時点の「授業アンケートの不全感」の原因を探るために、授業アンケート導入の過去の経緯をもう一度洗い出してみるという手法も必要な場合があるだろう。そのことが、学内的なネットワークの確立の検討や、場合によっては制度配置の見直しのきっかけになるかもしれない。

また、こうした「課題をはらんだ現状の事例」を報告者から

率先して報告いただけたことで、分科会参加者の側に「うまくいっていないのは自分たちだけではないのだ」「自分たちの大学の授業アンケートやFDの制度面はいったいどうなっているのだろう」等と安心感(?)や共感を生み、後のグループに分かれてのディスカッションでの発言を促すことにもつながったと思う。

(2) 「どう授業改善に活かせばよいのか」(三尾先生)

三尾先生からは、ご自身が授業で実際に実施しておられる、「学生の声」をすくい取る様々な試みを、具体的な手法やそこで判明した事実等を添えながら詳しく紹介いただいた。授業初回のアンケート、毎回の授業アンケート、大福帳、学期末の授業アンケート等を個人的に独自に実施されている様子。また、個人レベルでマークシート形式の質問用紙を作成し読み取りデータ化することは市販のソフトウェアとスキャナで可能で大きな初期投資を必要としないこと。授業時の教員の立ち位置のような一見細かく思える要因も学生の満足度に大きく影響することが、毎回の授業アンケートを取ってみると直感レベルではなく数字をとまなう実証レベルで示せたこと(データを示し、教室の反対側にまで引っ張れる長さのコードを教室に備え付けてもらうことに成功!これも一種の授業改善である)。授業評価と授業改善を関連させる場合に、三尾先生ご自身が気をつけられた留意点、例えば、「比較対照は個人間ではなく、あくまで個人内で行なおう」「調査結果を学生と共有しよう」「授業改善に頭打ちを感じた時に、試しに非常勤の先生と共同で授業開発・改善(他者との交流)を試みたら、非常に刺激的であった」等々(それぞれ具体的に紹介してくださったので、詳しくは本報告集の三尾先生の原稿を参照されたい)。

三尾先生の授業実践を見ると、これだけ豊かな内容の授業アンケートを実施できて、その結果を授業改善に活用できるのは、個人的な技能・能力によるところが大きく、大半の普通の教員には真似することができないとやはり諦めが先に立ってしまうかもしれない。だが、見習うべき、また注意すべきは、次のような三尾先生の自然な姿勢であるようにコーディネーターには感じられた。「授業するなら、よい授業にこしたことはない」→「学生にとってよい授業は自ずと教員にとってもよい授業である」→「そのために学生の声をすくい取ることは必須」→「授業アンケートも、学生の声をすくい取るツールの一つである(し、数多くあるツールの一つにすぎない)」→「フォーマルなものが実施されているのであれば、自分に

利用できる点を利用すればよい」→「フォーマルなもので不十分さを感じるのであれば、その点を補うために個人的な工夫をすればよい」といった姿勢である。

三尾先生の授業実践と比較すれば、大多数の普通の教員が技法面やノウハウや情報の蓄積面では追いつけないのは事実であろう。ただ他方で、上述の分科会参加者の事前アンケートの質問項目②の回答の傾向を見る限り、多くの普通の教員が多少なりともこうした姿勢で授業にのぞんでいるという事実もあるし、その事実にもっと信頼をおいてもよいのではないかと感じられた。同時に、三尾先生のご報告には、その根底に「教員各自が実践しているミニッツペーパーや感想文等の素朴な工夫があるにこしたことはない」「そうした工夫なくしては、授業アンケートと授業改善の関連性についての議論もあったものではない」「大いにそうした工夫に取り組んでください」といった参加者に対する力強く温かいメッセージが込められていたように感じた。

(3)「授業評価 Q&A」(大塚先生)

大塚先生からの報告は、すでにタイトルに表れているように「Q & A」集というスタイルで進められた(本報告集の大塚先生の原稿を参照)。実際の当日の報告でも、Q 1 から Q 19 の全てを順を追って解説するということはされず、高井先生、三尾先生の報告を受け、そしてフロアとのやりとりの中で応答的に報告をされた。そのお話をここでまとめることはコーディネーターには荷の重い仕事である。そこでFDと授業評価について大塚先生が「Q & A」集のスタイルをとることで伝えようとした(しかし直接に言及されることはあまりなかった)根底の授業評価・授業アンケートについての考え方の部分をコーディネーターなりに解釈し記し、その報告の雰囲気伝えることで任を果たすことにしたい。

まず、「Q & A」集の背景となるキーワードを二つ挙げるとすれば、大塚先生流に言えば「コミュニティ」「ローカリティ」だろう。上述の参加者事前アンケートの回答にも見られるように、教職員の授業アンケートへ関与の仕方・問題関心の持ち方は様々に多様である。また学校種の違いや授業形態の違いも実に多様である。そうした事情を勘案すれば、さしあたりは「授業評価・授業アンケートについては、どのような状況にもあてはまるような汎用性の高い一般解というものが存在しない」ということになるだろう。これが「ローカリティ」である。その観点からすれば、例えば、質問項目①にあるような、授業アンケート結果の公開・フィードバックのその後について、

なんとか「組織的に」「チェック」できないものかといった要求は、もしその「組織的」が「一般的」と同義で用いられているなら形容矛盾で無意味になると思う。だが、だからといって「組織的な」取り組みを行なう意味や必要がないということではない。例えば、今回、参加者事前アンケートに現われていた、数多くの悩み、困り事、とまどい、徒労感等々といったものは、それぞれの大学の「ローカリティ」から発したものである。そして、それらの悩み等は当然のことながら、教員一個人や一つの科目だけのレベルだけで解決できるものばかりではない。そこで、それらの悩み等を媒介として、ネットワークの確立、共同性の確立に向かうということ、これこそが「コミュニティ」である。そして、こうした「ローカリティ」に端を発する「コミュニティ」確立に向けての動きは、授業評価・授業アンケートの一種の文化的地位の確立、「実質化」、成熟のようなものを必要としているように思われる。

今回、分科会での参加者事前アンケートについて、主導的に提案・アドバイスをくださったのは大塚先生であった。その背景には、具体的な「ローカリティ」から発する問い(Q)にその状況に応じた答え(A)をメンバーが知恵を出し合い考えるという、一見当然で地味にしか思えない作業にこそ、授業評価・授業アンケートとFD活動を結びつけるという次のステージに進む着実な手立てはないという大塚先生の確信があったように今振り返ると思う。つまり、今回の分科会の試みは、分科会自体を、各自の「ローカリティ」から発せられる悩みや質問を交換し考え合う一種の(一時的で疑似的なものであったが)「FD共同体」、あるいはそのネットワーク確立の場所にしようというチャレンジであったように思われる。

分科会での全体討議の内容

大教室に移動してからの全体討議では、まず、各分団グループでの意見交換・ディスカッションの様子を、グループを代表してお一人の方に口頭でご報告いただいた。

分団①-1班

主として「授業評価の公開の仕方あるいは取り扱い」についてであった。

- ・ 授業評価の対象となる科目の幅をどのように決めているのか(例、オムニバス形式の授業の評価をどうするか、全担当者が個々に評価の対象となるのか、あるいは主担当者のみか)
- ・ フィードバックの様々なレベル(対担当教員、対受講学

生、大学管理職等々)を、それぞれ、どのような方法で、どのような範囲で、どういった手段で実施しているのかについての意見交換生、大学管理職等々)を、それぞれ、どのような方法で、どのような範囲で、どういった手段

- ・ 対担当教員のフィードバックの数値データに対し、改善ポイントを教員側から提出させることをしている大学は多かった
- ・ ウェブを利用した授業アンケートの回収率の低下は、ある程度仕方ないと割り切っているという報告

Q 他の参加者の方々の中で、もし人事考課、マネジメント、顕彰(例、ベストティーチャー)に使われている大学があるとしたら、その場合、どのようなスタンスからされているのか？授業評価はあくまで授業評価なのでは？授業評価以外の状況での数値比較に意味があるのか？

分団①-2班

主として「各大学の事例紹介と各事例に対する意見」。

- ・ グループ内でフィードバックもっとも進んでいるケース(例、個々の授業評価の結果の数値の一覧とそれに対する教員のコメントを掲載したものを公開、点数が悪い人には改善の報告書を提出させる、学内的に悪い人が誰の目にも明確される、非常勤の先生については人事に影響がある可能性も)の共有とそのケースを中心としての意見交換

Q 上記のケースでの担当者には果たして「一律」でいいのかという疑問があるのだが、他の参加者の中に類似したケースはあるだろうか？

Q 評価結果を見ても、どうしても分野・科目・授業形態によって、評価の上がらないものがあるのでこの点についても「一律」でいいのか、疑問が残る

Q 授業評価は何のために？この点がはっきりしていない。もともと調査ありきで導入され進展していたものに、後から活用を考えるのは難しい。本来、何のためにという目的を明確にしてから、その後、調査を再編成すべきなのでは？

分団①-3班

①-3班は特に多様な学部が集まっていたので、主として「現状の説明と意見交換」で時間が終了。

- ・ 自由記述欄の取り扱いに苦労しているところが複数ある(例、全てのデータを打ち込む労力やコストの問題)
- ・ フィードバック、公開というのが、ほとんど集計のみという点に問題があるだろうという指摘
- ・ フィードバックを返した後、授業改善については、基本的には教員個人にまかせきりで、組織的な対応がされていない
- ・ 集計結果を分析して改善につなげること
- ・ 改善のためのサイクルを作る必要があるのではないかという意見(例、あらゆる結果がひどい先生に対して授業視察のような制度があってもいいのではないか)

分団②-1班

主として、「現状の報告と意見交換」。

- ・ 全学共通とは別に学部独自のFD委員会で授業アンケート実施・集計の努力をしている事例の報告
- ・ 教員個人で独自のミニッツペーパーを作成し、次回授業で結果を反映させたプリントを配布する努力をしている事例の報告
- ・ 授業アンケート結果の学生へのフィードバックについて、時期が学期末に1回ではどうしても当該受講年度の学生への授業改善としての意味が出てこない、授業3～5回につき1回程度、当該受講学生の授業評価に反映させる機会が必要ではないかという意見

Q ウェブによる授業アンケートの回収率の低下をどのように改善することができるのか？

Q 本来であれば、学生のための授業をよくするためにとっている授業アンケートが、人事評価とつながるケースがあるのではないのか？どのように考えていったらいいのか？

Q 自由記述欄のネガティブな内容をほうっておいてよいものだろうか？

分団②-2班

主として「各大学が抱えている授業評価・授業アンケートに対する問題点とフリーディスカッション」。

- ・ 授業アンケートで学生が受けるプレッシャーについて(例、教員1人と学生3人といった状況では誰が書いたことなのかが分かってしまう)
- ・ 授業アンケートで教員が受けるプレッシャーについて(例、そもそも数字で評価されることに慣れていない、そうすると、数字の信頼性をあげつらったり、授業アンケート結果をそもそも見なかったり等)と、それに対する何らかの組織的な取り組み、授業アンケートのフォローアップ(例、アンケート結果の解釈の仕方も同時に伝える、カウンセリング、改善のヒントの示唆、よい先生の授業の見学、ピアレビュー等)の必要性

Q 学生側と教員側の授業アンケートに対するプレッシャーというものをどうやってフォローアップしていったらいいのか?

分団③-1班

主として「すでに一定期間なされている授業評価の現状の報告」。

- ・ 授業評価の、フラストレーションのためにネガティブなものになったり、あるいは管理的な色彩がつきまとったりしているので、そこを何とか変えていく必要がある
- ・ やはり数字の意味というのがよく分からないという意見
- ・ 今後変えていかなくてはという問題意識は一定の共有がなされていること
- ・ 授業評価の目指すべきものは、意味のあるFD、教員をサポートしてくれる事務の方も含めての、「みんなが幸せになれる(!)」授業評価
- ・ その他の様々なデータ(例、成績データ、入試データ、出席状況等)をできるだけマージさせクロスさせていって、授業改善・教育改善につなげていくことが可能だろうという意見(例、一律に<厳しい授業-低い、やさしい授業-高い>ではなく、出席態度が良好な学生では<厳しい授業-高い>という傾向も見られたケース)

Q 「みんなが幸せになれる」授業アンケートとして、評価型ではなく、課題抽出型(例、「問題点を選んでください」のような)というのは効果があるのではないのか?

Q 長期的な視点をいれて、学生と一緒に進めていくといったような、誘導的なものはできないだろうか?

Q 他の教員が行なっているいい点やいい工夫を拾い出して共有する、そのための授業評価にすればいいのではないのか?

分団③-2班

主として「現状では授業アンケートは授業改善に役立たないのではないか、では、役立てるためにはどうしたらよいか」。

- ・ 様々な形態や内容の授業があるので、共通のアンケート用紙の使用には無理がある
- ・ ただし、現行のアンケートであっても、評価が極端に低い授業という場合には問題のある授業をかなり見つけ出している

Q 質問項目をたくさん用意しカフェテリア方式にし、そこから7項目程度を選ぶことで内容的な妥当性も高まるのではないだろうか? 従来型のアンケート項目も3項目ぐらい残して、合計10項目程度のアンケートでどうだろうか?

分団③-3班

主として「いろいろな話を出し合いながら、フリーディスカッションをする中で情報共有」。

- ・ 授業評価の公平性を確保することの必要性(例、人数、環境、形態等の違う授業の中で出てきた数値を解釈する手立て)
- ・ 授業改善のための授業評価というところをあらためて作り直さないと、下手をすると、学生に迎合する、やさしい授業としてしまいがちになる点を検討できない
- ・ 本来ならば授業評価は、ディプロマポリシーとの関連で考えられねばならないはずだが、現状では十分ではない
- ・ 一時期にたくさんの授業で並行して行なわれる授業評価の現状の形態で、学生が授業評価について理解しているのか(例、質問項目内容についての理解)
- ・ 授業アンケート結果に対しては、ある程度のフィルタリングが必要ではないかという意見(例、一定の人数数以下の授業、出席率の低い学生の回答等)
- ・ 学生がFDに参加するという観点から言えば、例えば「理解度」というものを学生と共に話し合っていく必要があるのではないかという意見

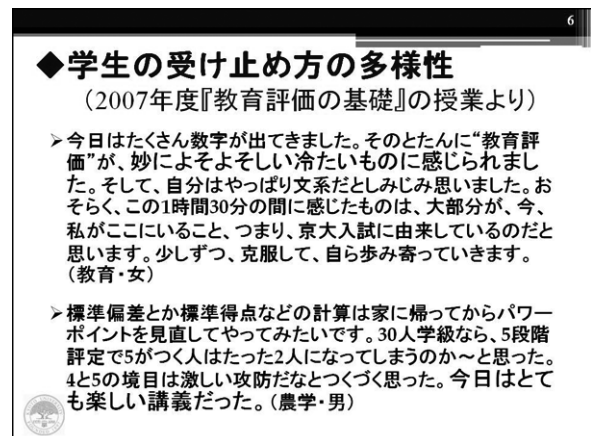
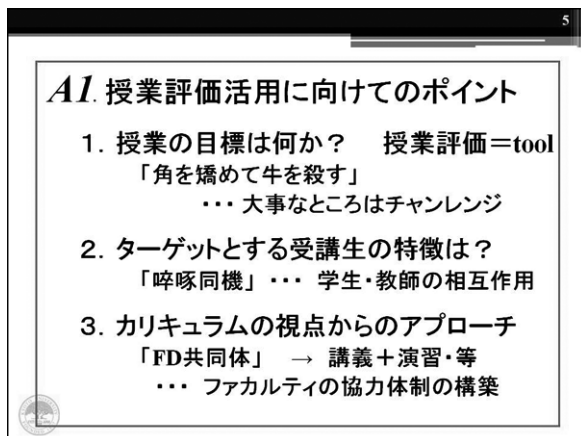
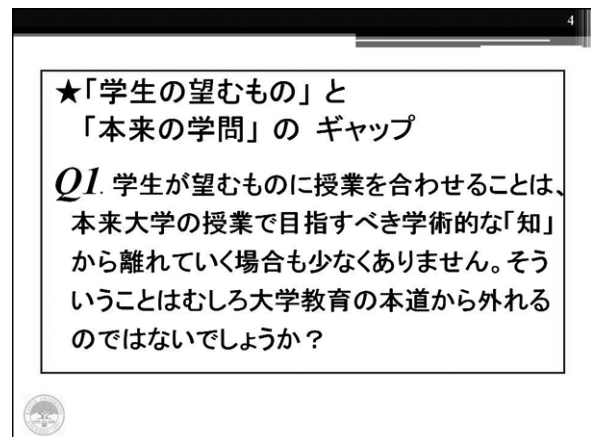
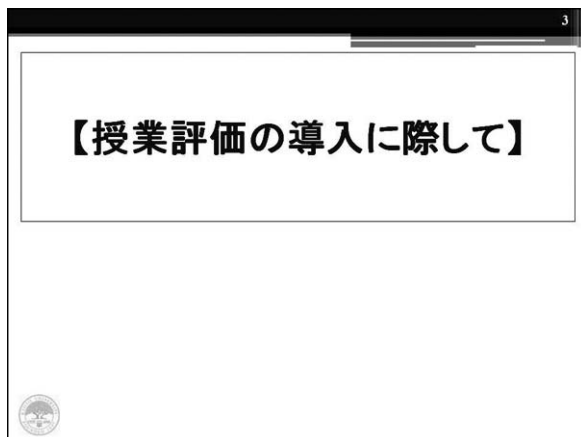
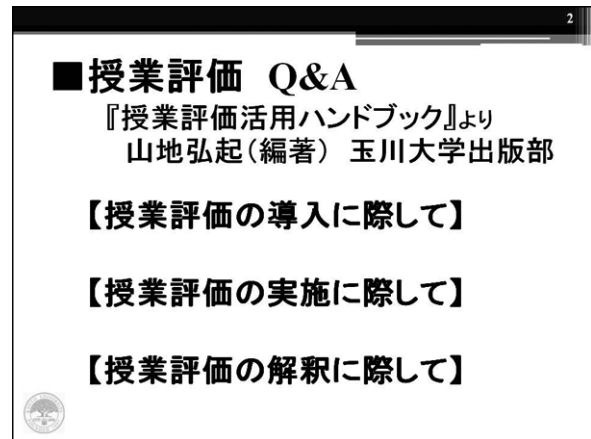
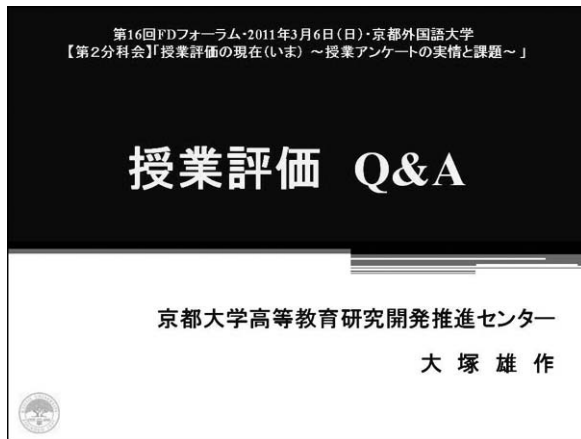
Q (分団①1班の質問に言及しながら)専任の給与や進退、人事評価と結びついた授業評価が行われているケースがあったり、任期制の新任の教員が任期ありから任期なしに移行するにあたり人事評価に結びつくケースがあったりする。これらは授業評価として成り立つのだろうか？

これだけの意見や事例報告や質問を出していただいたところで、ほぼ全体討議終了予定時刻となってしまった。せっかくの数多くの質問だったのだが、報告者の先生がたに回答をしていただき、そこからフロア全体での討議を深めていく時間を十分にとることができなかった。これは、ひとえにコーディネーターの不手際のためであった。ここで改めてお詫びをしたい。だが同時に、こちらから発言を促したりすることを一切せずともあふれんばかりに数多くの意見や事例報告や質問の出してくる様子(上記のまとめではこぼれ落ちてしまっているものもまだまだ多い)を見て、冒頭に述べた授業評価・授業アンケートの「実質化」の進展具合を強く感じた。ある意味で主体的な授業評価・授業アンケートの取り組みのステージは、ここから始まるのかもしれない。そして分科会終了後もしばらく、意見交換や連絡先交換を続けていらっしゃる何名かの参加者の方々の姿が見られたことは、今回の分科会が当初の企図を一定程度果たせたこと、参加者のみなさまに一種の「FD共同体」のようなものを——つかの間ながらも——味わっていただけたことを示しているのではないかという感想をもった。

授業評価 Q&A

京都大学高等教育研究開発推進センター 教授

大塚 雄作



★ 学生の意識・関心・レディネスの個人差

Q2. 受講学生の中には、意識の高い学生もいますが、あわよくば単位だけ取得したいといった受動的な学生もいますし、千差万別です。そんな個人差がある中で、授業評価はどのような意味があるのでしょうか？

A2. 評定平均値 と データの散らばり

学生の多様化 ← ユニバーサル化 etc.

↓
個人差にどう対応するか

- ①分散(標準偏差)への注目
- ②項目間の関連性を検討する
- ③クラス内の下位集団を探る
- ④下位集団・ターゲット層への対応を探る

◆ 毎回授業アンケート

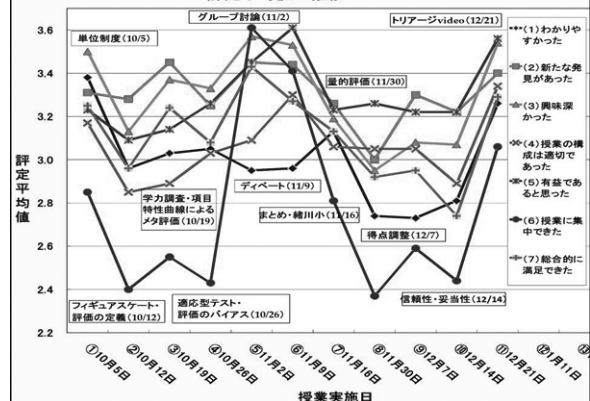
教育評価の基礎 (I) Portfolio 2006 - 6 (5月23日)

■この授業に関して、全般的にどのような感じか、以下のそれぞれの意見について、あなたの自覚の度で、4段階で評定(該当の数字を○で囲む)して下さい。

学生番号	氏名	あはれ	あやう	はあは	あはれ
(1) わかりやすかった		4	3	2	1
(2) 新たな発見があった		4	3	2	1
(3) 興味深かった		4	3	2	1
(4) 授業の構成は適切であった		4	3	2	1
(5) 有益であると思った		4	3	2	1
(6) 授業に集中できた		4	3	2	1
(7) 総合的に満足できた		4	3	2	1

■今日の授業で、個人的に、ポイントと感じた点、疑問点、印象に残った点、授業で改善すべき点など、自由に記述して下さい。(なお、必ず何か記入して下さい)

京都大学2010年度後期『教育評価の基礎』 評定平均値の推移



◆ 第4回授業 N=40 「わかりやすかった」の標準偏差が小さい

項目(欠損値数)	平均	標準偏差	4%	3%	2%	1%
(1) わかりやすかった(-2)	3.05	0.50	15.0	75.0	10.0	0.0
(2) 新たな発見があった(-2)	3.25	0.62	35.0	55.0	10.0	0.0
(3) 興味深かった(-2)	3.33	0.57	37.5	57.5	5.0	0.0
(4) 授業の構成は適切であった(-2)	3.03	0.52	15.0	72.5	12.5	0.0
(5) 有益であると思った(-2)	3.26	0.54	30.8	64.1	5.1	0.0
(6) 授業に集中できた(-2)	2.43	0.77	10.0	30.0	52.5	7.5
(7) 総合的に満足できた(-2)	3.08	0.65	25.0	57.5	17.5	0.0

◆ 第10回授業 N=27 「わかりやすかった」の標準偏差が大きい ← 統計的内容

項目(欠損値数)	平均	標準偏差	4%	3%	2%	1%
(1) わかりやすかった	2.81	0.72	14.8	55.6	25.9	3.7
(2) 新たな発見があった	3.22	0.68	37.0	48.1	14.8	0.0
(3) 興味深かった	3.07	0.66	22.2	66.7	7.4	3.7
(4) 授業の構成は適切であった	2.89	0.68	18.5	51.9	29.6	0.0
(5) 有益であると思った	3.22	0.57	29.6	63.0	7.4	0.0
(6) 授業に集中できた	2.44	0.87	14.8	25.9	48.1	11.1
(7) 総合的に満足できた	2.74	0.75	14.8	48.1	33.3	3.7

第4回(N=40)「評価のバイアス」	平均値	標準偏差	(1)理解度	(2)新たな発見	(3)興味度	(4)構成適切度	(5)有益度	(6)集中度	(7)満足度
(1)わかりやすかった	3.05	0.50	1.000	0.040	0.120	0.475	0.234	0.336	0.221
(2)新たな発見があった	3.25	0.62	0.040	1.000	0.409	0.211	0.252	0.143	0.388
(3)興味深かった	3.33	0.57	0.120	0.409	1.000	0.310	0.388	0.199	0.617
(4)授業の構成は適切であった	3.03	0.52	0.475	0.211	0.310	1.000	0.245	0.345	0.363
(5)有益であると思った	3.26	0.54	0.234	0.252	0.388	0.245	1.000	0.405	0.597
(6)授業に集中できた	2.43	0.77	0.336	0.143	0.199	0.345	0.405	1.000	0.537
(7)総合的に満足できた	3.08	0.65	0.221	0.388	0.617	0.363	0.597	0.537	1.000

第10回(N=27)「信頼性・妥当性」	平均値	標準偏差	(1)理解度	(2)新たな発見	(3)興味度	(4)構成適切度	(5)有益度	(6)集中度	(7)満足度
(1)わかりやすかった	2.81	0.72	1.000	0.383	0.571	0.408	0.372	0.306	0.664
(2)新たな発見があった	3.22	0.68	0.383	1.000	0.290	0.605	0.636	0.330	0.473
(3)興味深かった	3.07	0.66	0.571	0.290	1.000	0.589	0.548	0.582	0.635
(4)授業の構成は適切であった	2.89	0.68	0.408	0.605	0.589	1.000	0.445	0.391	0.737
(5)有益であると思った	3.22	0.57	0.372	0.636	0.548	0.445	1.000	0.473	0.484
(6)授業に集中できた	2.44	0.87	0.306	0.330	0.582	0.391	0.473	1.000	0.514
(7)総合的に満足できた	2.74	0.75	0.664	0.473	0.635	0.737	0.484	0.514	1.000

①第4回から第10回では、理解度の標準偏差が大きくなり、理解度の個人差が大きくなっていることがわかる。満足度との相関が高い。
 ②第4回と第10回で、集中度はほぼ同じ平均値であるが、第10回の方が、興味度との相関が高いなど、他項目との関係が強い。
 ③第4回は、理解度の個人差が大きく、興味度と満足度の相関が高くなっている。興味度、有益度、集中度などの寄与が高い。
 ④第10回は、理解度の個人差が大きく、理解度と満足度の相関が高くなっている。理解度と構成適切度の満足度への寄与が高い。

★ 学生の授業評価能力について

Q3. 授業評価を導入しようとする、学生に授業を評価する能力があるのかという反論が出されることがありますが、学生に評価法を指導したり、評価能力の高い学生だけの評価を利用するなどの工夫が必要となるのではないのでしょうか？



A3. 授業評価は授業優劣の「評価」か？

- 授業評価の目的は？
授業間の「優劣」を比較するための評価か？
授業のさまざまな側面を浮き彫りにするための「アンケート」→「授業アンケート」と呼ぶ
- 授業の「評価能力」は学生だけに求められるか？
授業は、教員と学生の協同制作物では？
学習共同体の形成の視点
- 授業の内容面の評価であれば・・・
ピア(peer)評価 ← 授業公開など
多角的に情報収集！



★ 授業評価を実施するインセンティブ

Q4. 授業評価を実施して、教員としてはどういうメリットがあるのかよくわからないのですが。



A4. 授業評価を実施するインセンティブ

- 教員評価・教員表彰制度？
アメリカでは、テニユア制度・年俸制
評価のための授業になっては本末転倒
- 大学教員としての向上心 → 情報の必要性
↑
大学からの組織的サポートの整備？
ゲストスピーカーを招く費用
フィールドに出る費用と時間マネジメント
TAなどのアシスタントの充実
→ FD共同体の形成



★ いい授業とは？

Q5. そもそも「いい授業」というのはどのような授業であるのかがわからないと、授業評価を行うことができないと思うのですが。



A5. いい授業とは？

- 授業の目的、受講生の特徴、等々に依存
- 一つの面がよいと言うことが
他の面でもよいと言うことにはならない
→ 羅生門アプローチ

ex. ビデオ視聴・グループワーク・・・
比較的わかりやすく面白い
アクティヴ・ラーニング らしい？
動きに流されて体系的に捉えにくい
- 「授業改善」は 結果ではなく プロセスそのもの



★ 授業評価の負担感

Q6. 授業評価を教員一人が解釈しなければならなかったり、そこから、授業改善に結びつけていかねばならなかったり、ちょっと大変だなあという印象があるのですが。

A6. 義務化されたのは「組織的」取組

- 授業の改善は一人で達成できるものではない
教育は FD共同体(大学・部局・講座・等)の
ソーシャル・キャピタルである！
- 教員が同じようなティーチング・マシンになったら
→ きっと つまらないキャンパスになり
授業も 活性化していかないのでは？
→ 教員のそれぞれの個性が活きるような
バランスと連携が取れていけば
→ 個々の教員の負担感も軽減？

【授業評価の実施に際して】

★ 授業評価の構成要素

Q7. 授業評価アンケートにはどのような観点が必要とされるでしょうか？

A7. 授業評価の観点・項目

- 授業内容：体系性・難易度・・・
- 授業方法：関心配慮・双方向性・・・
- 教員の特徴：しゃべり方・熱心さ・・・
- 学生の学習姿勢：予復習・自主学習・授業集中度・・・
- 大学の学習支援体制：教室環境・図書等の充実・学習支援体制・・・
- 授業の印象：満足度・興味度・・・ etc.etc.

Cf. 『評価の不確定性原理』

網羅的に項目を含めればよいというものではない

◆30項目の因子分析の例(2004・5) —— 京大工学部授業アンケートより

- ・ 授業構成の適切性：理解・目的・興味配慮・体系的・等
- ・ 授業の成果：意味あり・学力・有用・進路有効・等
- ・ 学習の積極性：予復習・授業集中・積極質問・等
- ・ 授業の応答性：考える工夫・疑問への応答・等
- ・ 授業の環境：クラスサイズ・教室環境・等
- ・ シラバスの参考

「授業評価アンケート事務局の公開」

関西地区FD連絡協議会は、2008年6月、関西地区FD連絡協議会・各高校ならびに関西地区の大学・短大・大学を加盟して、FD活動に関する調査を実施し、合計128校からの回答を得ました。調査への協力、誠にありがとうございました。

上記調査の結果、多くの大学から、実際に採用している授業評価アンケートの公開の許可を得ることができました。この調査の成果を広く伝え、研究WG授業評価研究50では授業評価アンケート事務局の公開をお願いします。

本事務局では活用していただいた大学名は掲載しておりません。また、公開の許可をいただいた学校の種別・機関・学系名は多数に上っているため、利用者の便宜を考慮し、「匿名化4年制大学」「匿名化4年制大学」「大規模」「匿名化4年制大学(中規模)」「短大」「大学」「大学」「理工系」「工学系」「農林系」「経済系」「文学系」の9つのカテゴリにわけています(分属の都合上、各カテゴリに属している事例もあります)。なお、すべてのカテゴリの事例は一部がランダムに示されていますので、ご参照下さい。

Cf. 関西地区FD連絡協議会
HPに授業アンケート集
http://www.kansai-fd.org/publications/resource/jhsg_es.html

匿名化4年制大学 (大規模)	匿名化4年制大学 (中規模)	匿名化4年制大学 (小規模)	短大	大学
経済系	理工系	農林系	文部二系	二部二系(工学)

25

★ 授業評価の項目数

Q8. そのように見ていくと、項目数がかなり増えそうなのですが、どのくらいの数の項目数が適当なのでしょう？



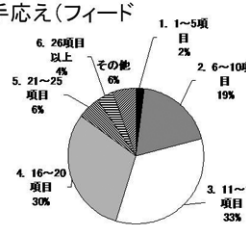
26

A8. 項目数はどの程度？

- 評価項目： 多少多めでもこなせる
ただし、回答の手応え（フィードバック・改善）がないと、学生は真剣に回答しなくなる。

- 必要な項目は使い続ける姿勢が大切

関西FD授業評価WS(2008)事前調査より N=53



27

★ 授業評価は無記名か記名か

Q9. 授業評価は無記名方式と、記名方式で、かなり違ってくるものなのでしょうか？ 無記名方式と記名方式は、それぞれどのような長所・短所をもっていますか？



28

A9. 記名式 or 無記名式(約9割)

- 無記名式： 回答により率直な意見が反映される
やや厳しめの評価平均値となる
いい加減な回答・排他的意見が出る
他の指標等との関連性を検討しにくい
- 記名式： 責任を持った回答がより期待できる
成績や他の調査等とのマージが可能
回答にお世辞的なものが増える可能性
- 評価の甘い・辛いよりも、個人内差の情報が大切
→ どちらも検出される個人内差情報はほぼ同様
- 成績データ等との関連性を検討できるなどのメリット
→ 個人的には「記名式」が好みであるが・・・？



29

★ 評価段階数

Q10. 評価項目の評価段階は何段階にするのが適当でしょうか？



30

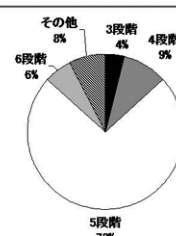
A10. 評価段階数は？

- 5段階評価(7割超)
中間の評価に集まりやすい(中心化傾向)

- 4段階評価(1割程度)
肯定回答傾向(yes tendency)でやや甘めの結果

関西FD授業評価WS(2008)事前調査より N=53

- 個人内差に関してはいずれも同様の結果
授業平均値は4段階と5段階で0.9超の相関
どちらでもよい？ → 好みて
個人的には4段階が好み(報告書が書きやすい)



31

★ 授業評価の実施時期と回数

Q11. 授業評価は、学期の間のいつ頃実施するのが適当でしょうか？また、1回だけで十分でしょうか？



32

A11. 授業評価の回数と時期

- 授業評価実施回数
1回実施が9割以上
比較的早めの時期と最後の2回の実施
毎回授業＝ミニツツペーパー等 → 個人的対応
- 授業評価の時期
試験前の最後の授業
比較的早めの時期(5回目前後)の大学もあり
5回目前後 → その学期の授業に反映できる



33

★ 授業形態の差による授業評価

Q12. 授業といっても、講義形態のものから、実験や実習、演習、ゼミなどもありますし、あるいは、一人の教員で担当する授業もあれば、複数の教員によるリレー式の授業もあります。多様な授業形態がある場合に、授業評価はどのようにしたらいいのでしょうか？



34

A12. 授業形態と授業評価項目

- 授業形態に合った授業評価項目
講義形式：体系性・質疑応答・etc.
実験・演習・実習：環境・レポート・TA・etc.
- 各授業の方法や工夫にあった授業評価項目
自由に項目を設定できる授業アンケート

Cf. ①カフェテリア方式 (ex. イリノイ大学、NIME)
授業評価項目のデータベース
調査項目を選んで授業評価アンケート構成

②REAS: Webを利用したアンケート調査作成システム (Realtime Evaluation Assistance System)



35

★ 授業評価を実施する際のコスト

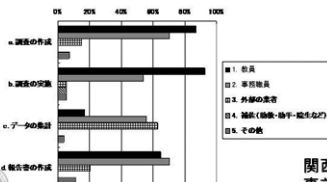
Q13. 授業評価は、実施するとなると、それなりの予算も確保する必要があるでしょうし、また、データの処理や分析、報告、管理など、さまざまな人的負担も増すと思います。そういったコスト面で、どの程度のものを考えておく必要があるのでしょうか？



36

A13. 授業評価のコスト&リソース

- コストはどこでかかるか？
 - ① マークシートの印刷・読み込み・集計 → 業者委託
 - ② 授業評価実施 → 授業単位の配布・回収
 - ③ 報告書の作成 → 教員・職員(一部業者委託)



教職員の負担大？
→ Institutional Researcher (IR)等の専門職の必要性
→ IT利用・ケータイ利用等の推進

関西FD授業評価WS(2008)
事前調査より N=53



37

【授業評価の解釈に際して】



38

★授業評価のもつ情報の限界性

Q14. 授業評価では、学生の一部の反応しか引き出せないと思います。特に、学生が授業を理解できたかどうかは表現されないと思いますが、その点はどうか考えたいいいでしょうか？



39

A14. トライアングレーション

- 授業アンケート・試験・ミニッツペーパー etc.
理解度：授業アンケートの結果＋試験
→ 異なる方法の結果を利用 情報の確度が上がる
= triangulation 三角測量
- reflection 学習の振り返り → learn to learn
ミニッツペーパー、大福帳、何でも帳、リフレクションシート、ポートフォリオなど
→ 次の授業の教材として利用可



40

◆コミュニケーションのツールとしての授業評価

◎前回(2003.5.14)のコメントから

■ p 値・ t 分布・検定の過剰・検定力

学生
の
自
由
記
述

講師
の
コ
メ
ン
ト

が あ っ た ら、そ う い う 問 題 意 識 を も っ て、事 実 を 確 認 し て 下 さ い。今 の と こ ろ、こ れ は、一 つ の 定 義 と し て、検 定 統 計 量 に 効 果 を 及 ぼ す 大 き さ と 考 え て お け ば い い の で は と い い ま す。

◎ あ と、何 故 自 由 度 を $N-2$ と し て い る の か が 知 り た い で す。

◎ $df = N-2$ 、 $t = \frac{\bar{p} - \mu}{\sqrt{\frac{1}{N-2} \sum (p_i - \bar{p})^2}}$ など 1 分 布 の と こ ろ で は $N-2$ が 出 て き ま し た が、な ぜ $(N-2)$ の か 疑 問 に 思 い ま し た。サンプ ル サ イ ズ の と の 関 係 は よ く 出 て き ま す が、今 日 の p と の 関 係 は 図 で わ か り や す く 説 明 し て い た だ け た の で、納 得 で き ま し た。

→ 自 由 度 は、後 章 (p.307) で 詳 しく 説 明 し て い ま す が、ど の 案 内 ず、推 定 値 六 分 法 の 推 定、サンプ ル サ イ ズ か ら 引 いた も の で あ る と 考 え て お け ば い い で し ょ う。た と え ば、母 分 散 を 不 偏 分 散 で 推 定 し て、そ の 値 を 検 定 に 用 い る 場 合 は、そ の 推 定 を し て し ま っ た 後 は、理 論 的 に 推 定 値 を い る い う と 考 え た 場 合 に も、一 度 決 め て し ま っ た そ の 推 定 値 を 変 え る け り に は い き ま せ ん の で、そ の 検 定 統 計 量 の 為 に、 $N-1$ の 自 由 度 を 用 い る の が 正 し い と い い ま す。相 関 係 数 の r に よ る 検 定 の 自 由 度 に 関 し て は、p.211 ~ 215 に 詳 しく 説 明 し て い ま す の で、そ こ で ま た 箇 語 を 記 し て お き ま し ょ う。

◎ 検 定 の 前 1 章 の 説 明 と 習 得 の 速 さ の 関 係 に つ い て 学 ぶ だ が、ま っ たく 正 反 対 の 条 件 付 け 確 率 で あ る の か の よ う に 考 え て い る 人 が 多 い と 書 い て あ っ た の で、注 意 し て 観 て お き た い と

「『検し』」あんなにものを感じることができたのは、これからです。私は、統計を専門にしているわけではございません。教育心理、教育評価の領域でやってきて、元々理系だったため、統計を扱う機会が多くなって（データ解析などを周知）から住みかたして、得となくこういふ授業を担当してきています。あくまでユーザーですので、教員は理論的側面にまで深く立ち入ってはいませんが、心理測定を専門としている高橋先生のテキストは、私にとっては非常に新鮮です。皆さんと一緒に学びの機会が与えられていると思っております。

◎ 教育アンケート、個人的に結構好きです。帰無仮説と対立仮説が突然ゴチャゴチャになることがあったのですが、そんなときに有益ですね。

→ アナログは、そういうように、適材適所、使っているというのでは、

41

★クラスの規模と授業評価の関係

Q15. クラスの規模が、授業評価結果に何か影響を及ぼすということはあるでしょうか？



42

A15. 外的要件と評定平均値

- 大規模クラスより少人数クラスがよい？
大規模クラス：学生の多様化
→ 評定平均値は中央付近に比較的安定
少人数クラス：高い平均値が得られやすい 不安定
少人数ゼミや個人指導の授業は
評定方式の授業アンケートは不適
- 受講登録システム等の違いによる差
ex. 登録自由方式 → 最後に残る学生が多いのは？
京大工学部の例：アンケート回収数との相関
「クラスサイズ適切」とは-0.435だが…
「総合的に意味あり」とは+0.213



49

★授業評価結果の公開の範囲

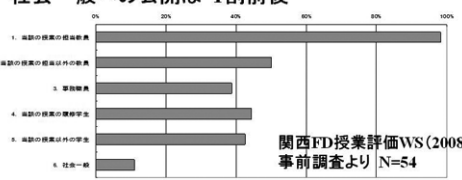
Q18. 授業評価結果は、個人情報という見方もあり、公表・公開の範囲は慎重さが求められると思いますが、どの程度の範囲に公開したらよいでしょうか？



50

A18. 授業評価結果の公開の範囲

➢ 担当以外の教員間で共有は 5割程度
事務職員まで公開は 4割弱
受講学生へのフィードバックは 4割強
学生一般への公開は 4割強
社会一般への公開は 1割前後



公開範囲	割合 (%)
1. 担当以外の教員間で共有	50
2. 事務職員まで公開	40
3. 受講学生へのフィードバック	45
4. 学生一般への公開	45
5. 社会一般への公開	10

関西FD授業評価WS(2008) 事前調査より N=54

51

★授業評価と授業改善の結びつき

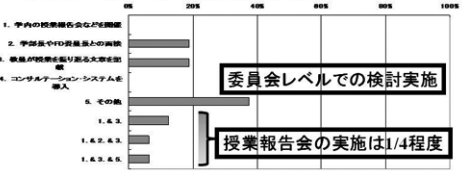
Q19. 授業評価は、授業改善に結びつける必要があると言われますが、具体的にどのように授業改善に評価結果を活かしていったらいいのでしょうか？



52

A19. 授業評価から授業改善へ

➢ 「評価→改善」は容易ではない
各教員の自主性に任せている大学が2/3程度
面接利用・授業の振り返り文章は2割程度
委員会等のレベルでの検討・報告書 etc.



改善方法	割合 (%)
1. 学内の授業研究会などでの検討	20
2. 学部長やFD推進委員との相談	10
3. 教員が授業を振り返る文章を制作	20
4. コンサルティング・システムを利用	10
5. その他	40

委員会レベルでの検討実施
授業報告会の実施は1/4程度

関西FD授業評価WS(2008)事前調査より N=54

53

A19. 授業評価から授業改善へ

➢ 授業は簡単に変わるものではないという認識から出発
→ 何か変わった部分が出てくればしめたもの

➢ まずは振り返り(reflection)の機会を仕掛ける
ex. 京大工学部教育シンポジウム『私の授業』
授業評価結果と共に
自分の授業を紹介
→ 授業評価がFD共同体の共通言語に

➢ 自分の授業で新たなトライ
ex. グループワーク、パワーポイントの取捨、ミニツツパーの導入 → 授業評価の変化！




54

ご清聴
ありがとう
ございます




了

どう授業改善に活かせばよいのか

早稲田大学教育・総合科学学術院 教授／FD推進委員会 副委員長

三尾 忠男

大学コンソーシアム京都 平成23年3月6日

第2分科会 授業評価の現在(今)～授業アンケートの実情と課題～

「どう授業改善に活かせばよいのか」



三尾忠男
(早稲田大学)

1-1 私のある授業 : 学生制作の授業情報誌より

「教育方法研究C」三尾忠男

情報多数

- ・ 内容 ☆☆☆
- ・ 単位 ◇◇◇
- ・ 内容 かなり工夫されていてわかりやすい、面白い。教員に必要な技術も得られる。先生は毎回学生を笑かそうとする。
- ・ 単位 大福帳に感想を書くと出席に。テストよりレポート重視。レポートは毎回必ず出そう。

「教育方法学」三尾忠男

情報多数

- ・ 内容 ☆☆☆
- ・ 単位 ◇◇◇
- ・ 内容 授業方法が色々と斬新。先生はフレンドリーで話もわかりやすく、たまにグループワークもあるので楽しい。
- ・ 単位 不定期にあるレポートの数は多いが、それをこなさなくては単位は来ない。

出典:「マイルストーンエクスプレス2010」早大マイルストーン編集会

1-2 授業初回にアンケート① 実施

授業アンケート 初回 実施用紙

授業アンケートの目的は、授業の質を向上させることです。授業アンケートの結果は、授業の改善に活用されます。

授業アンケートの項目は、以下の通りです。

1. 授業の目的、内容、方法について

2. 授業の進め方、スピードについて

3. 授業の雰囲気、先生の態度について

4. 授業の満足度について

5. その他、授業に関するコメントについて

授業アンケートの結果は、授業の改善に活用されます。

目的

①授業者が、学生の履修動機と意欲などを知るため。

②学生自身に履修動機などを再確認してもらうため。

方法

独自開発のマークシートで。

1-2 授業初回アンケート② 結果

設問	n	平均
1 科目登録時に、講義要項(冊子)の記載をしっかりと読んだ	191	3.02
2 科目登録時に、シラバスシステム(Web)の記載をしっかりと読んだ	191	2.88
3 このクラスは、積極的に選んだ	190	3.84
4 どのクラスでもかまわないと思っていた	190	2.24
5 クラス選択で、時間割の都合の影響が大きかった	190	4.02
6 クラス選択で、講義要項の内容の影響が大きかった	190	2.76
7 クラス選択で、シラバスシステム(Web)の内容の影響が大きかった	188	2.42
8 情報誌(マイルストーン)でこのクラスの記事を見た	189	3.58
9 情報誌(ワセクラ)でこのクラスの記事を見た	191	1.39
10 クラス選択で、情報誌(マイルストーン)の記事の影響はなかった	190	2.76
11 クラス選択で、情報誌(ワセクラ)の記事の影響はなかった	189	4.42
12 クラス選択で、先輩等の話を参考にした	191	1.40
14 教職課程での、この科目の意義について十分理解している	190	2.80
15 自分にとって、重要な科目と思っている	191	3.82
16 塾の講師をしたことがある(している)	190	2.67
17 家庭教師をしたことがある(している)	191	1.90
18 この座席位置は、他の授業でも座る位置である	190	2.78
19 この座席位置を選んだ理由に、積極的な理由がある	190	2.16
21 この調査は記名でもかまわない	188	4.34

1 ← 5
いいえ いえ

1-3 毎回の授業アンケート① 実施

授業アンケート 毎回 実施用紙

授業アンケートの目的は、授業の質を向上させることです。授業アンケートの結果は、授業の改善に活用されます。

授業アンケートの項目は、以下の通りです。

1. 授業の目的、内容、方法について

2. 授業の進め方、スピードについて

3. 授業の雰囲気、先生の態度について

4. 授業の満足度について

5. その他、授業に関するコメントについて

授業アンケートの結果は、授業の改善に活用されます。

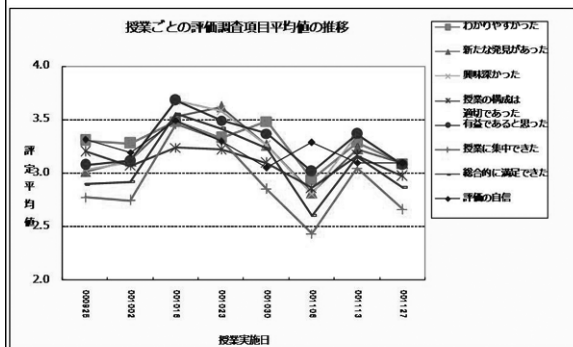
目的

- ・ 出欠管理にも活用。
- ・ 座席位置と満足度の関係

方法

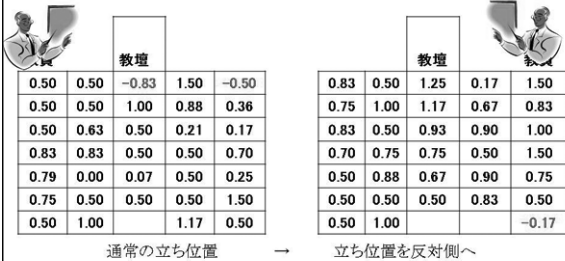
- ・ マークシート
- ・ 授業中、後半に配布。
- ・ 終了5分程前に、記入の指示。
- ・ 特徴あるコメント、質問は適宜、授業で紹介

1-3 毎回の授業アンケート② 結果「推移」



4:あてはまる ← 1:あてはまらない

1-3 毎回の授業アンケート③ 結果「立ち位置」



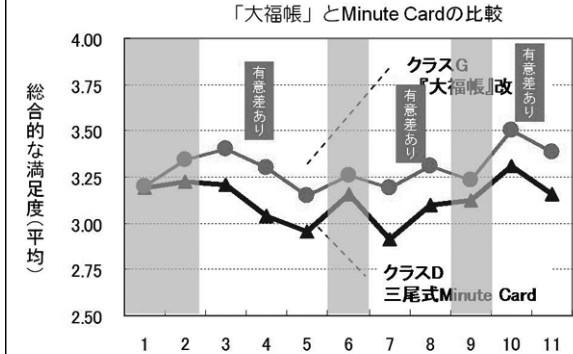
1-3 毎回の授業アンケート④ 実施「大福帳」改

- 目的**
- ・学生一人ひとりとの意見交換手段の活用
- 方法**
- ・授業中程で、返却。
 - ・終了5分程前に、記入の指示。
 - ・毎週、返信を記入。
 - ・特徴あるコメント、質問は適宜、授業で紹介。
- ※「大福帳」は織田準彦氏開発。

1-3 毎回の授業アンケート⑤ 実施「大福帳」改

「総合的な満足度」を

1-3 毎回の授業アンケート⑥ 考察：手段の比較

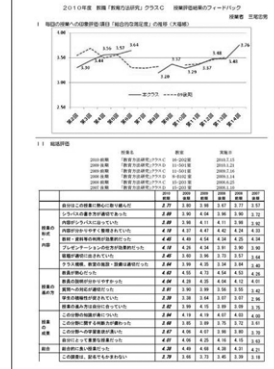


1-4 学期末の授業アンケート① 実施

- 目的**
- ・総合的な授業評価のために。
- 方法**
- ・マークシート
 - ・最終週の1週間前。
 - ・項目は独自項目。一部、大学共通項目と同じ。

1-4 学期末の授業アンケート② 結果

- 集計結果は、学生にフィードバック
- ・簡単な分析結果を授業の最終回に配布する。
 - ・授業者から直接、前年比較や推移について説明する。



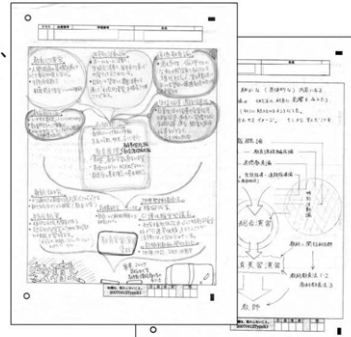
2-5 授業アンケートを学生の学習にも活かす①

「大福帳」は学生一人ひとりの学習履歴。

2-5 授業アンケートを学生の学習にも活かす②

例

学期はじめに、履修科目全体の関係図を描かせ、カリキュラムを学生に理解させる。



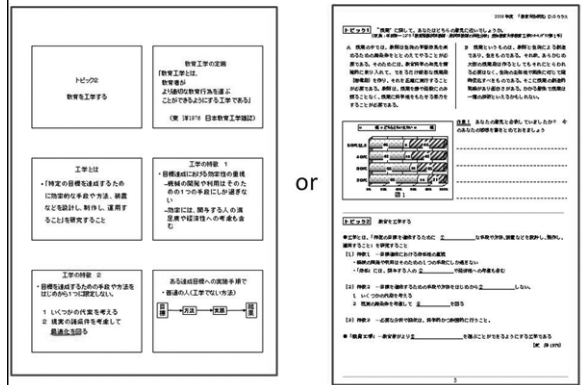
2-6 他者との交流を積極的にはかる。

授業評価調査を継続して実施し、改善や工夫を繰り返していると、頭打ちになる。もしくは、授業者が燃え尽きる。

そこで、同業者（同じ領域の教員）と相互に授業参観を行い、さらに授業中であっても介入する（トランシーブ使用）ことで、刺激と緊張をもつことができた。さらに、成績評価の方法と基準についても議論することで、本来の授業改善に結びついていた。



3-1 配布資料と提示スライドの関係



3-2 授業者にとって支えになったもの

- 出発点
 - 身の程を自覚していること（情意的サポートを受ける態度）。
 - 授業改善の工夫が効果的に時間を生み出し、場合によっては研究になる可能性を知っている（情報サポート）。
- 周りに自己評価の手段が豊富だった。
 - 学生による授業評価調査の各種具体的事例（情報・道具的サポート）
 - ビデオ撮影ができた（道具・人的サポート）。
- 相談者がいた。
 - （学外）同じような取組みの教員と共同研究者（人的・情意的サポート）
 - （学内）TAやゼミ生など

3-3 私の日常の授業実践の雑感

- ① 総合的な授業評価を自身の授業間で比較。しかし、マンネリ感も出てくる。
- ② 毎回の授業評価調査での「大福帳」は、学生把握の手段として効果大。しかし、大人数では苦痛になってきた。
- ③ ビデオ撮影は、デジタルメモリ型（SDカードなど）により、簡便になっており、さらに日常的な手段になった。
- ④ はじめは自分自身で。3年目ぐらいから非常勤講師と一緒に授業開発・改善が、かなり刺激的。
- ⑤ 調査結果は、当該受講者に解説とともに最終回に報告することで、授業者として結果を受け止めやすい。
- ⑥ TAを観察者として活用。
- ⑦ IT活用は、授業のマンネリ化の始まり？！
- ⑧ 個人の授業改善は、カリキュラムの中での責任をどこまで、果たしうるのか（教育目標、成績評価、授業印象）

「学生による授業評価アンケート」実施の現状と活用への課題：大谷大学の場合

大谷大学文学部社会学科 教授

高井 康弘

「学生による授業評価アンケート」実施の現状と活用への課題：大谷大学の場合

大谷大学教務委員会FD部会長
高井康弘

1. はじめに
2. 試行期の授業評価アンケートとFD研究
3. 授業評価アンケート：実施と結果開示の現状
4. 組織的なデータ活用への課題

大谷大学

文学部9学科学生3472名(女性1333名)
大学院修士98名、博士43名
大谷大学短期大学部学生212名(女性164名)
計:3725名



教育職員(専任)
124名
(講師以上108名)
事務職員(専任)
83名
京都市
地下鉄北大路駅すぐ上
2010年5月1日時点

1. はじめに

原則一律で実施してきた

「授業をより良くするために：学生による授業評価アンケート」

に焦点を当てて、報告する。

- 大谷大学でも、教員がミニツツペーパー的なものを用いて、個々に授業アンケートをおこなったり、学科で独自のアンケートをおこなっている例もある。

- ミニツツペーパー的なもののほうが、個々の授業改善への情報把握と学生へのフィードバックには適していると言われる。

- こうした営為に大学のFDがどうかかわるかは、ひとつの課題だが、以下では、一律式アンケートと組織的FDの関連の問題に絞って考える。

大谷大学では全学一律の授業評価アンケートは1998年に開始された。はや13年が経過している。

導入前には、アンケート結果を踏まえての授業改善の組織的仕組みの導入が同時になされるべきだとの提案もあった。

しかし、当時は大学としては、そこまで踏み込まず、一律アンケートのみを導入した。

以降、授業評価アンケートの試行とFDの試行は別々に進む。

2. 試行期の授業評価アンケートとFD研究

2-1. 1998～2004年度：アンケート試行期：

自己点検評価委員会が企画実施。

後期専任教員の授業対象。

抽出から希望科目へ。

授業後半に一律実施。

回答の匿名性保証。

実施回収作業は事務職員から教員へ。

授業形態別に違う項目。

集計結果は担当教員に提供。広報にて公表。

試行期の授業評価アンケートにかんする基本的了解や特徴は、現行のアンケートにも受け継がれている。

※勤務評価には使わない。

※個々の授業の評価結果は、自己点検・評価委員会が厳重に管理する。

※個々の教員のみ、個別結果報告書は渡す。

※教員個々の自発的な授業改善の営為に任せる。

授業評価の文化的土壌の未成熟性に配慮。

2-2. FD研究班の立ち上げ

- ・アンケート試行期の1999年度、大谷大学真宗総合研究所指定研究の一つとして開始。2003年度終了。
- ・教員相互の自発的授業改善のあり方を研究する。
- ・グループワークなどの授業法の実践研究、授業をビデオ撮影しての研究会なども実施。
- ・「導入教育：学びの発見」の企画等の形で結実。
- ・しかし、ビデオ授業評価では互いに消耗する。教員間の授業の相互評価にはより慎重となる結果となる。
- ・授業評価アンケートとの連動は、テーマとしてあまり取り上げず。
- ・2004～2006年度はFD活動の空白期となる。

2-3. 授業評価アンケート本格実施への転換（2005～2006年度）

2004年4月、学校教育法改正。大学の自己点検評価、結果公表が法的に義務化。第三者評価機関による認証評価へ。

2005後期、全開設科目対象 担当教員任意実施

2005後期、「より良い学びの場をめざして 在学生満足度アンケート」も実施

2006年度から、学生による授業評価アンケートは、原則として前後期全開講授業を対象に実施。質問紙形式を簡易化した現行のものに変更。

2006年6月、広報2005臨時号にて、2002～2004年度結果報告書公表。

2006年9月、広報2006臨時号にて、2005年度結果公表。

3. 授業評価アンケート：実施と結果開示の現状

3-1. 現行の授業評価アンケート

3-1-1.

担当：自己点検・評価委員会
アンケート部会。

所轄：企画課。

アンケート内容：

- I. 授業について 6問
- II. あなた自身の授業への取組みについて 3問
- III. 総合的評価 1問
- IV. 担当教員独自の設問(最大5問)
- V. 所属学部・学科、学年・課程
- VI. 自由記述(授業の良かった点、改善すべき点など)

各項目5段階評価

(参考) I. 授業についての質問

1. 授業はシラバスに沿って進められましたか。
2. この授業の内容を理解ないし習得できましたか。
3. この授業からものの見方や考え方について知的刺激を受けましたか。
4. 教員の話し方は明瞭で、聞き取りやすかったですか。
5. 私語などを放置せず、しっかりとした授業運営がなされましたか。
6. 学生の人格やプライバシーへの配慮はなされていましたか。

(参考)Ⅱ. あなた自身の授業の取り組みについて

7. 授業中は勉学に集中できましたか。

8. 予習・復習・読書・議論・トレーニングなどを通して授業を理解するよう、自発的に努めましたか。

9. この授業にはよく出席しましたか。

Ⅲ. 総合的評価

10. 全体的にみて、あなたにとって充実した授業でしたか。

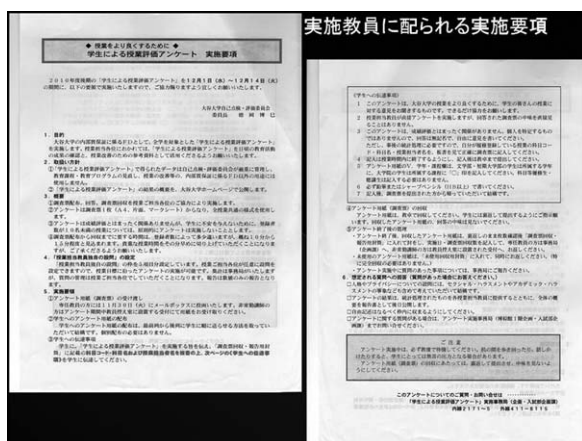
3-1-2. 実施方法:

各授業単位で実施。

登録者10名以上の授業でおこなう。

授業の最後10分程度を利用して教員が配付。その場で回収する。

各学期の終盤に実施。



3-1-3. ねらい: アンケート配付教員への「実施要項」より

A. 授業担当教員へ:

「日頃の教育活動の成果の確認と、授業改善のための参考資料として活用くださるようお願いいたします」。

自らの授業について、学生の目を通して客観的に把握し、自己改善するための資料を提供する。

B.

「教育課程・教育プログラムの見直し、内部質保証に係るFD以外の用途には使用しません」。

「授業評価アンケートを、大谷大学の自己点検・評価活動の一環として、本学の教育システムの不断の点検・改善に役立てると同時に、授業担当者が日頃の教育活動の成果を確認し、今後の授業改善の参考資料として活用するために、全学的取り組みとして実施する」。

全体の「結果報告書」に記された実施概要より

2つの目的→部局担当者と授業者、それぞれの自発的改善にゆだねている状況については後述。

3-1-4. 実施・回収状況(2010年度前期分)

・全開講科目を対象に実施。

・実施科目 794

・全登録者数 34,811

・回収数 23,018

・回収率 66.1%

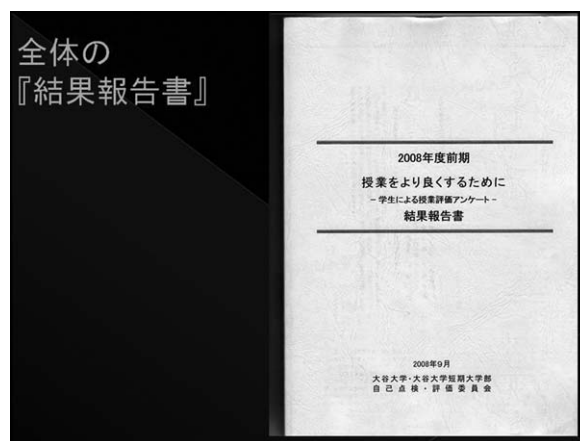
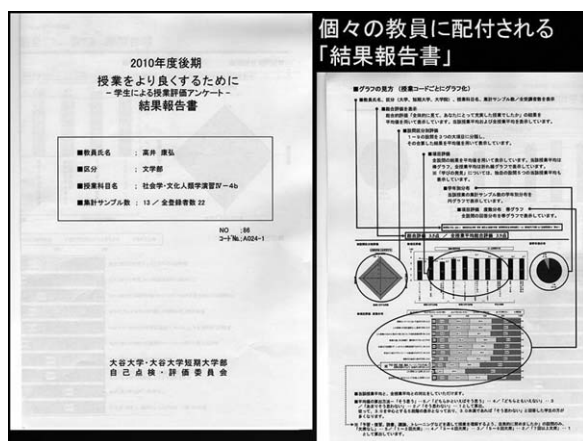
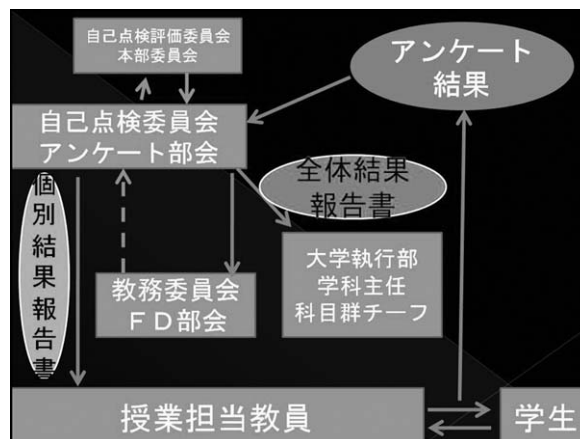
。集計サンプル数 23,018

3-2. アンケート結果の学内開示と狙い

※個別の「結果報告書」が、担当教員に、自発的に自らの授業を改善するための資料として提供されている。(次学期前半時点)

※全体の「結果報告書」が、大学執行部、学科主任、科目群チーフ、関連委員会チーフに、担当域の状況把握と改善への資料として提供されている。(次学期前半時点)

※学生には、全体結果を「広報」やホームページにて開示。



※ 対外的には、大学ホームページにて授業評価アンケート票、実施要項、各年各学期の調査結果(全体数値)を公開している。

大学ホームページ→大学概要→大学基礎データ→大学評価→点検評価に関する報告(PDF): 2002~2010年度

(参考)個別教員への「結果報告書」の形式

総合評価●点/全授業平均総合評価●点

設問区分別評価:総合評価・学生の姿勢・授業に対する評価・教員に対する評価の4点のダイアグラム

項目評価:項目それぞれにつき、個別点と全授業平均点を、棒グラフと折れ線グラフで比較表示。

項目評価度数分布:項目それぞれにつき、5段階の各回答のパーセンテージを、帯グラフで表示。

自由記述の一部をワープロ打ちしたものを挿入。

(参考) 学科主任等への「結果報告書」(500頁余)

1. 全体(文学部・大学院・短期大学部)の平均値
設問区分評価のダイアグラム、項目評価度数分布、項目評価平均値、各項目と総合評価の相関を示す散布図
2. 文学部全体・共通科目全体・各共通科目・学科毎・セット科目全体・諸課程科目全体の平均値
3. 短期大学部も同様。
4. 大学院全体の平均値。
5. 授業別集計結果: 大きな科目範疇(学科科目(学科名)/共通科目(科目名)/諸課程)、サンプル数・登録者数のみ揭示。グラフは個別配付分に同じ。巻末に授業コード毎の自由記述を列挙)

3-3. 授業評価アンケート実施の効果

◎個々の教員における自発的活用はある程度ある。経年比較によると、全学平均数値は漸進的に向上。

※アンケートを実施するなかで、授業に向かう教員の意識は変化。(学生の視点が重要であり、授業は学生に評価されるものであるという意識の定着。アンケートにおける質問項目の設定が、授業者の自己評価ポイントの提案と共有につながっている。)

4. 組織的なデータ活用への課題

4-1. 組織的なデータ活用は未着手

・関連委員会や学科などで、「結果報告書」を資料に、自己点検と授業改善の営みが自発的に始まることを期待している。大学として、それを組織的に検証したり、支援する活動は始めていない。

・また、個別の「結果報告書」を受け取った教員の授業改善は、本人の自発性に任せている。改善の組織的検証や改善への組織的支援は始めていない。

4-2. FD部会と授業評価アンケート

1999～2003年度: 真宗総合研究所FD研究班の活動。その後、FD活動中断。

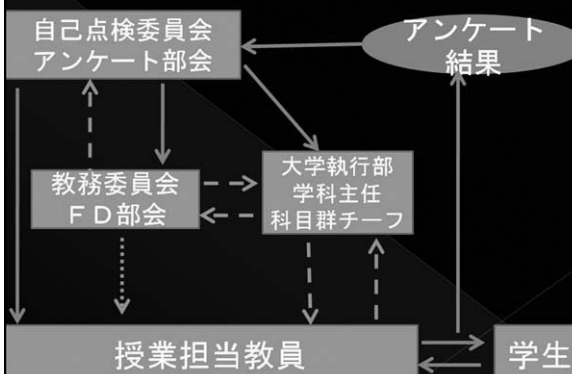
2007年4月、大学院設置基準においてFD義務化。

2007年4月、教務委員会FD部会設置。

※ FD部会は、部会員・協力員のFD活動に関する学習からスタート。
学外の各種学習会への参加。
学内における講演会などFD研修会を実施。
教育理念の共有をねらう新任教員研修の実施。

※ 組織的FDにおけるアンケートの活用は、これからの課題。

4-3 データの組織的活用への課題



4-3-1 FD活動の性格転換？

発足時から 大谷大学のFD活動は、教員間の水平的な互助的自発的授業改善の営みとして、自らを性格づけてきた。

そこから一歩踏み出して、学科・科目群・個々の授業のアンケート結果データを、自己点検・評価委員会から入手し、評価し、大学組織の立場に立って、検証・指導に係ることになる。(垂直的關係への転換)

4-3-2 個人データの秘匿性と活用との関係

◎ 従来、全体結果報告書の編集においては、個人データの秘匿性に配慮。

- ・ 授業担当者名を伏せた個々の授業アンケートデータを、ランダムに配置し、編集。
- ・ 学科主任は結果報告書を受け取っても、500頁のなかに、自分の学科の授業データが分散しており、学科状況の把握が困難であった。→活用に至らず。

去年末から個人データの秘匿性に踏み込んで
全体結果報告書の編集方針の変更。

科目別

共通科目：人間学、学びの発見、英語、他の外国語
各学科の学科科目、セット科目、諸課程科目

大学院

短期大学部/共通科目、学科科目、自由科目、諸課程：

担当者名非表示も職階（教授～非常勤講師）は表示

ただし、
この一覧を学科主任等に配付するか
どうかは検討中。

新編集案では、各項目の値と10項目の平均値を表示。

その数値が全体のそれより、0.5ポイント高い箇所は青字表示、0.5ポイント低い箇所は赤字表示にしている。

いくつかの傾向がみえる？

必修演習は青字が多く、講義は少ない。

同一授業で、評価項目毎に、青字と赤字が混じるケースは少ない。など

4-3-2 データ評価をめぐる問題

個人データ、科目別編集データを入手したとして、では、それをどう評価するか？

◎ たとえば、FD部会と各学科主任が評価作業をおこなうとして……

明らかに数値の低い箇所について、担当者呼び出し、話を聞くか？

数値の高い授業を顕彰するか？

◎ いずれにしても、数値の意味は、授業のカリキュラム上の位置によって変わってくる点を考慮して評価する必要はある。

4-3-2

FD部会と学科主任の体制と能力の問題

評価、支援作業に踏み込むとなると……

現在のFD部会のスタッフでどうやりくりするか？

現在のFD部会は、部会員7名（文学部5名、短期大学部2名）の構成（2年任期）。

プラス、FD協力員を部会員の出ていない学科から各1名。部会員は自学科のFD協力員も兼ねる。

大半は、若手の教員。押しは効かない。

FDや大学教育を専門にしている部会員はおらず、一般教員の立場で参加。

授業の他、他の委員会を多数掛け持ちし、全員集まる部会を開くのは、困難な状況。

授業評価・支援にかかわる担当者は、

その作業をどのような手順と表現で進めていくかについてのノウハウと熟練が必要のように思う。

専門スタッフを養成する余裕がないなかで、一般教員が、他の業務との作業バランスをとりつつ、その作業をどのように担うのか？

学科教員、学科主任も超多忙。

かつて、各学科からFD協力員の推薦をお願いした時も、学科主任会議で猛反発の反応を得たことがある...

9学科では、まとまって実質的な討議ができているところとそうでないところがある。一律にアンケート活用を試みるのではなく、少数の学科に絞って、まずは始めるのが得策かもしれない。

4-3-3 まとめに代えて

・学士課程教育としての質保証が問われる。

・全体のカリキュラムのなかで機能しているかどうかの観点から、個々の授業の状況を把握する必要がある。

・また、個々の授業が、相互に関連できているか逐次検証する必要がある。

・これまでのFD活動のなかで、その認識は共有できてきている。

しかし、教員、事務職員とも、対応すべき業務が増え、学生にも手間がかかる人が増え、時間的、エネルギー的により厳しくなっている。

改善への道筋が具体的に提示できれば、相互評価で神経をすり減らす懸念や余計な仕事が増えたというストレスを乗り越えることができるはずだが、その辺がみえない現状である。

そんななかで、試行的にアンケート結果の活用に取り込むことには、担当者としてためらいがある。

追加のひとこと...

可視化することの必要性・限界・問題

・授業営為は原則、内外に開かれているべきものであろうと思う。

・学生による授業評価は、そのひとつの方法である。それによって可視化できる側面があり、そのことが、教員/学生に良い効果をもたらす側面はある。

・かなりの時間と労力をかけてやっている以上、そのデータを活用すべく考えねばならない。そこで本日のような発表をおこなった。

しかし、限られたFD担当者の力を、どの程度そこに配分すべきか、ということも考える。FDが扱う守備範囲が、何でも屋の如く広がっている現状がある。

また、教員の教育活動には、アンケートで可視化できない部分のほうがむしろ多いかもしれないとも考える。

「大切なものは見えない」ということはある。「見えるもの」に教員が傾くことの功罪を慎重に考える必要はあると思う。